令和5年（2023年）
1月号
ひと、まち、輝く
静岡気分
広報しずおか No.370
発行 / 静岡市　編集 / 広報課
〒420-8602 静岡市葵区追手町5-1
https://www.city.shizuoka.lg.jp/
●困ったときは…静岡市コールセンター
☎054-200-4894（平日8:00～20:00、土日祝日・年末年始8:00～17:00）

ものづくりの彰往考来
伝統工芸の未来へ

問合せ　産業政策課☎281-2100

静岡の伝統工芸 …… 01～05
2022年市政を振り返る / 静岡市財政事情 …… 06～07
静岡市歴史博物館グランドオープン ほか …… 08
健康ひろば / お知らせ ほか …… 09～15
きらっと / しずおか推し ほか …… 16

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

昨年の9月に襲来した台風15号により、被災された皆さまにお見舞い申し上げるとともに、災害支援に多大なるご支援、ご尽力くださいました多くの皆さまに感謝いたします。

今後も復旧に向けて全力で取り組んでまいります。

また、「ウィズコロナ時代」に向けて、引き続き、「“生命（いのち）”を守り“生活（くらし）”を取り戻す」という“2つのLife”の指針のもと、感染拡大防止対策と地域経済の活性化に向けて積極的に取り組んでまいります。

昨年は、「静岡浅間神社廿日会祭（はつかえさい）の稚児舞楽（ちごぶがく）」が国の重要無形民俗文化財に指定されたことに始まり、「清水灯台」の国の重要文化財指定、「有東木の盆踊」を含む「風流踊（ふりゅうおどり）」のユネスコ無形文化遺産登録と続き、本市の歴史的資産が次々とその価値を認められました。

そして、1月13日には、「5大構想」のひとつである「歴史文化の拠点づくり」の核となる「静岡市歴史博物館」がグランドオープンを迎えます。さらに、大河ドラマ「どうする家康」（NHK）の放送にあわせ、1月27日には、大河ドラマ館を静岡浅間神社境内に開館します。

市民の皆さまには本市の歴史への愛着をより深めていただけるよう、市外、県外の皆さまにはこれらの施設をはじめ、本市を訪れていただけるよう集客に取り組んでまいります。

4月には、「第4次静岡市総合計画」（4次総）がスタートします。4次総は、2030年度までの8年間を期間とする本市の最上位の計画であり、歴史や文化、国際拠点港湾・清水港、あるいは南アルプスや駿河湾など、本市が誇る様々な地域資源をさらに磨き上げ、「世界に輝く静岡の実現」を目指していこうとするものです。

「彰往考来（しょうおうこうらい）」
（過去をあきらかにして、未来を考える）

本年は、静清合併から20年の節目を迎える年でもあります。

先人たちの努力の上に発展を遂げてきた歴史に想（おも）いを巡らせつつ、本市の輝かしい未来を見据え、着実に歩みを進めてまいります。

結びに、市民の皆さまのご健勝とご多幸を心より祈念し、新年の挨拶といたします。

静岡市長 田辺信宏

～もしもに備えて～
静岡市からの
防災情報は…

同報無線
こちらは「こうほう しずおか」です…

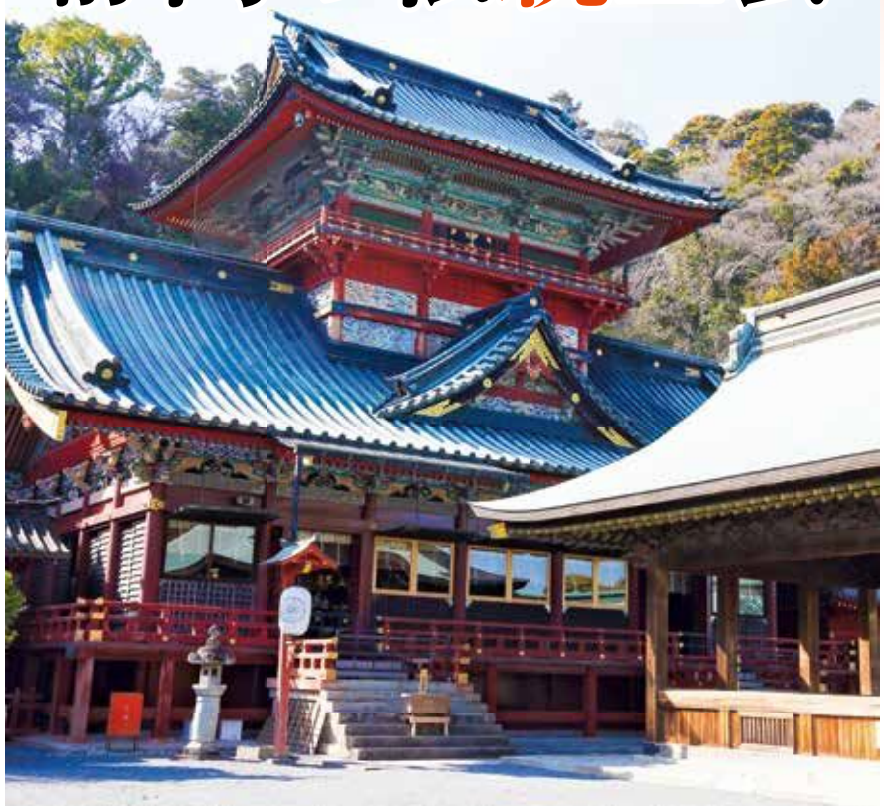
●同報無線の電話案内サービス
放送内容を市HPや電話で確認できます。
☎0180-99-5656（通話料がかかります）

●市防災メール
空メールを送信し登録すると、緊急情報などが送信されます。

●市LINE公式アカウント
トップページの「静岡市の防災情報」から、市内の緊急情報などを確認できます。

〈問合せ〉危機管理総室☎221-1243

静岡の伝統工芸



静岡市の地場産業は、徳川三代将軍「家光公」によって静岡浅間神社が造営された際、全国各地から名工が集められ、その優れた技術が幾世代にもわたって伝承され、以来今日まで、長い歴史と伝統の中で多くの人々に育まれ、地域経済の中心として発展してきました。

現在でも、多数の伝統工芸が脈々と息づいており、職人の手で高い技術の製品が生み出されています。

- 駿河指物（さしもの）
- 駿河漆器
- 駿河蒔絵（まきえ）
- 駿河塗下駄（ぬりげた）
- 駿河張下駄
- 駿河和染
- 静岡挽物（ひきもの）
- 賤機焼
- 井川メンパ
- 駿河竹千筋細工
- 駿河雛具（ひなぐ）
- 駿河雛人形

伝統を守る名工たち

今回、伝統工芸の現状（いま）を知るため、静岡県立大学の学生広報大使※がインタビューと体験に行きました。 ※大学から任命された学部・短期大学部の学生で、大学の魅力や様々な取組などをSNS等を通じて学生目線で発信している。

伝統の守り人

駿河塗下駄工房 佐野 佐藤 仁美 さん
SATO HITOMI

伝統とカジュアル

駿河塗下駄には大きく分けて伝統的な漆塗りのものと、染料を使った染めのものの2種類があります。漆塗りのものは、完成までに50工程ほどあり、中には完成までに1年以上かかるものもあります。染めのものは漆塗りに比べると歴史が浅く、今作っているものは、師匠である父が考案したもので、色合いを通して国産の桐（きり）の美しい木目を楽しめます。漆のものは卵の殻を使った卵殻細工（らんかく）を施し、昔ながらの絵柄を表現することで伝統工芸品として魅力と人気がある一方、染めのものは犬や猫、パンダといった自由でポップな絵柄を表現することで、現代の洋服でも履きこなせるカジュアルさがあり、最近注目されています。

▲猫のデザインをあしらった染め下駄

伝統を継ぐということ

現在、師匠や市内のベテラン親方に付いて学んでいます。職人になったばかりの頃は、「伝統を引き継ごう。昔から培われ、受け継がれてきたものをここで無くしてはいけない」という思いでした。しかし、今では伝統技術の継承を意識しつつも、染め絵の下駄づくりをメインに、SNSでトレンドをチェックしたり、海外の人にも手に取ってもらえるようなオリジナルのデザインを考えたりと、普段下駄を履かない人にも取り入れてもらいやすい作品づくりを意識しています。

一方で、これで本当にこれまでの技法を引き継げるか、という不安もあります。今は伝統的な漆の技法を学びつつも、今の時代に対応できるよう、若い職人との交流の中で模索しています。

いいことずくめの下駄を普段履きに

下駄は少しかかとが出るくらい、1cmはみ出るくらいに履くのが“粋”とされ、そうすることで自然と姿勢が良くなり、足の指も鍛えられます。このような理由から、お客さんの中には理学療法士に薦められて購入される方もいます。履き続けることで風合いが増すのが下駄の良いところ。鼻緒が汚れれば交換し、底が擦り減れば修理できるため、長く愛用いただけます。

普段のメンテナンスも、履いた後に布で汚れを拭き取る程度で大丈夫です。それに、足の開放感はクセになること間違いなしです。ぜひ、一度履いてみてください。きっと手放せなくなりますよ。

師匠 佐野 成三郎 さん
SANO SEIZABURO

昔は下駄を作れば売れる時代でした。その頃は弟子が取れたし、大変な下積み修行を経て、やっと一人前になったもの。今は生活の保障ができないから弟子は取れないし、若い人たちは、最初から大変な下積み修行では続かない。まずは、面白いところから始めて興味を持ってもらうこと、それから徐々に難しい事にチャレンジしていくのが良いのではと思っています。昔の事ばかりやっていてもそれは“伝承”でしかなく、新しい時代に合わせて未来につなげていく事が“伝統”だと思います。

インタビューを終えて

県立大学 国際関係学部2年
山田（やまだ） 美優（みゆ）さん

佐藤さんの作る下駄はとてもカラフルで、若者や海外の方々にも好まれると思いました。師匠であるお父様の「ただ同じことをやり続けるのは伝承で、伝統とは新しい時代に合わせ、次につなげていくことだ」という言葉が印象的でした。その言葉通り、伝統を守るために新たなスタイルに挑戦する佐藤さんの姿勢に憧れます。

伝統の守り人

株式会社 宮秀 宮原 秀訓さん
MIYAHARA HIDENORI

静岡を代表する地場産業

雛具は、御所車（ごしょぐるま）や箪笥（たんす）、長持（ながもち）など道具類だけでも40種類近くあり、屏風（びょうぶ）や台なども含めると大変な数があります。駿河雛具の特徴は、ひとつひとつが本物と同じ工程で作られていることです。手のひらに乗るような針箱も、引き出しが箱状に作られ、漆が塗られ、蒔絵も施されています。

静岡で生産される雛具は、かつて全国シェアの90%を占めたほどで、まさに静岡を代表する地場産業と言えます。

職人を直撃する厳しい現実

長い歴史の中で培われた匠（たくみ）の技が作り出す静岡の雛具は今、失われようとしています。

雛人形は七段飾りが本来の姿でしたが、近年は核家族化や少子化に拍車がかかったことに加え、雛具・雛人形に対する人々の思いも変わり、昔ながらのものが求められなくなってきているのが現状です。

また、安価な外国製品の台頭により、国内の生産シェアが減少してきています。雛具・雛人形は、生産地が明確に表示されていないため、国産のものを選びづらくなったことも生産減少の要因のひとつ。

このような状況では、職人たちは地場産業で生計を立てていくことは難しく、新たな担い手も出てこないため、後継者不足に陥っているのは間違いない事実です。

▲ペットとの記念日を祝う人形

“本物”を知ってもらいたい

静岡の職人技の魅力はなんと言っても精巧なものづくりです。いつの間にか雛具は「大事に飾って眺めるもの」として扱われていますが、静岡の職人の作品はぜひ手に取って見てもらいたいです。実物をそのまま小さくしたと言っても過言ではない、細部までこだわったつくりに魅了されるはずです。しかし、本物に触れられる機会も減っています。そのため、ホテルへの貸出等を通じて作品を残す取組をしています。

一方で、時代に合わせた新しい取組として、今や家族の一員と言える大切なペットとの記念日を祝う「ペット節句」という商品を開発しました。気軽に見て、触れてもらえるよう工夫したかわいい人形ですが、ここにも静岡の伝統技術を身近に感じてもらいたいという思いと、職人の技術が詰まっています。

一度途絶えてしまった技術の復活は、容易なことではありません。“本物”は一目瞭然。ご自身の目で確かめ、購入いただくことが伝統工芸を後世に残すことだと思っています。

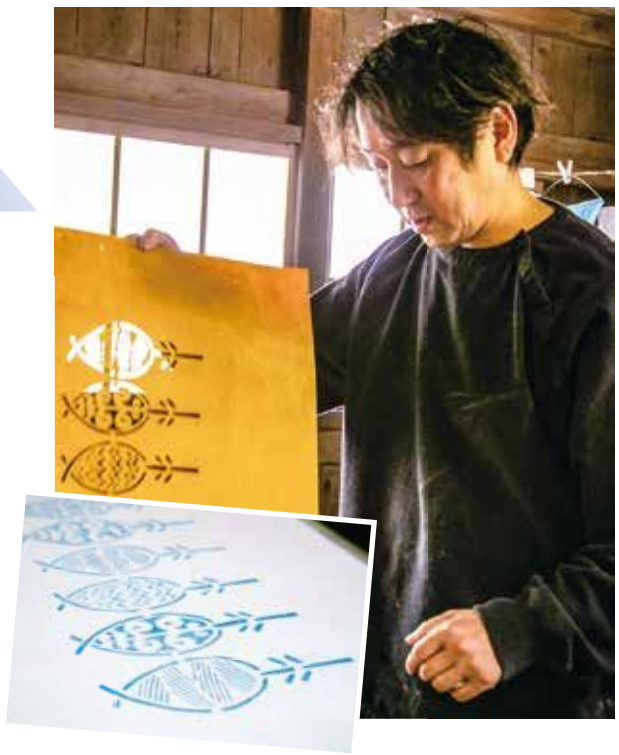
インタビューを終えて

県立大学 国際関係学部4年
出口（でぐち） 幸映（ゆきえ）さん

御所車や御駕籠（おかご）など、手で触れながらインタビューしました。職人の手によって一つひとつ作られる「駿河の雛具」からは、長年培われてきた技と思いを、曲線美、装飾の繊細さ、素材の重厚感等、随所に感じることができました。市場の変化を受けて、私たち「買い手」も審美眼を磨く必要があると感じます。

伝統の守り人

伊藤喜一朗さん（いとう染工）
ITO KIICHIRO



“ジャパンブルー”藍染めの魅力

私は、江戸時代の享和（きょうわ）の頃から続く8代目藍染め職人です。元々は葵区新通に工房を構えていましたが、今は穏やかで緑豊かな葵区の中山間地で、作品を作っています。

藍染めは植物染料「藍」を用いた染色技法で、「藍」のみで絵柄を表現するものですが、その色調は淡い色から濃い色まで48段階あり、1色だけで濃淡や陰影を表現できることが最大の魅力です。

藍液に漬けた直後の布は茶褐色をしていますが、空気に触れることで酸化し、藍色に変化します。これを何度も繰り返し色の層をつくることで、色が濃くなると同時に、布が丈夫になることも特徴です。

静岡市は、染色作家として有名な芹沢銈介（せりざわけいすけ）の出身地であり、市内に美術館もあることから、染色は、市民にとってなじみのある技法だと思います。

身近であったはずの染色品

江戸時代の藍染め品は、庶民的な染め物のひとつでした。しまっておいても虫に食われにくいという防虫効果に加え、消臭・抗菌と、日常使いに必要な機能が詰まった染め物だったからです。また、色あせたり、シミのついた綿や麻の洋服などを藍で染めることで、洋服が生まれ変わり、使い続けることもできます。しかし、今ではそれらを知る人も少なくなっています。

私の家は以前、藍染め着物を専門としていましたが、時代と共に需要が減ったことで、今の人が普段の生活で使うものの染色へと転換しました。また、新型コロナウイルスの影響により、展示会など直接作品を見て買ってもらう機会が減ったため、現在はインターネットを通じた販売もしています。藍で染めるものも、レザーやペーパーコード、木など布以外にも広げ、藍で染めた和紙を使った一閑張りにも挑戦しています。

▲藍で染めたペーパーコードを使ったバッグ

染色品を再びその手に

藍染め品といえば、代表的な物として暖簾（のれん）や風呂敷などが思い浮かび、高価で敷居が高いイメージもあると思います。最近の傾向としては、ストールや手ぬぐいなど、ご自身で使われるような安価な品が好まれています。特に手ぬぐいは、結婚式の引き出物として贈られることもあり、これをきっかけに藍染めの魅力を感じて、他の作品を購入いただけることもあります。

先人の知恵が詰まった藍染め品は、長く使うことで愛着がわいてきます。忘れかけられている藍染めを、多くの人に興味を持ってもらえるよう、今までなかった素材に染める努力を続けますので、ぜひ手にとってもらい、身近に感じてもらえたらうれしいです。

インタビューを終えて

県立大学 国際関係学部1年
大内（おおうち） 彩楓（さやか）さん

インタビューを行う前は、藍染めというのは少し遠い存在に感じていました。しかし、実際に工房に伺うと、伝統的な柄だけではなく、花柄やグラデーションのカバンやストールなどが飾ってあり、とても身近に感じました。そして、江戸時代から続いている伝統を受け継ぐという伊藤さんの努力と意思に感銘を受けました。

伝統の守り人

鳥羽漆芸 鳥羽 俊行 さん
TOBA TOSHIYUKI

伝統技法と新素材の融合

我が家は三代続く漆器職人で、漆器制作に砂を使う「金剛石目塗」の技法を今に伝えています。漆を塗る際に良質な砂を使って丈夫な下地をつくり、その上に漆を一つひとつ丁寧に塗り重ねることで、美しく深みのある艶を持ち、熱や水にも強い実用的なものになります。

漆器を作り続ける中で、ある時、伝統ばかりを大切にし続けてきたことで、現代のニーズにマッチしていないことに気づき、昔からの技術を未来へつないでいくためには時代に合わせることも大事だと感じました。そして、新しいものづくりへのチャレンジを始めました。それが、約20年程前に起きたワインブームの際に思いついた、ワイングラスへ漆を塗ることでした。しかし、ガラスへ漆を塗ることはできても、乾くと剥がれてしまうという壁にぶつかりました。そこで、昔から甲冑に漆が塗られていたように、漆と金属の相性がいいことをヒントに、ガラスへ金箔を貼った上に漆を塗ることで、「うるしのグラス」が誕生したのです。これをきっかけに、漆器に馴染みがなかった若者にも受け入れられるようになりました。

▲うるしのワイングラス

時代の先端を行く伝統工芸

漆器には抗菌効果があるばかりか、漆が剥げてくれば塗り直すことで新品同様によみがえり、長い間使い続けることができます。壊れて捨てることになったとしても、自然由来のものでできており、自然に返ります。また、手間暇のかかる手作業で丁寧に作られているものだからこそ、電気などのエネルギー消費も少なく、環境負荷が軽減されます。つまり、伝統工芸品を使うことは、SDGsと深いつながりがあると考えています。

使い手の後継者不足

伝統を伝えていくためには、職人自身も変わらないといけません。親から子へ一子相伝のように技術を受け継いでいくのではなく、新しく外から人を入れることで、新たな考えを生み、時代に合わせて変化していくことも必要です。

しかし、もう一つ大事なことがあります。職人の後継者不足はよく取り上げられますが、職人の我々から見れば「使い手の後継者不足」も大きな問題です。伝統工芸品が作られても、それを使う人がいないと成り立ちません。伝統工芸における美しさの本質は「用の美」、つまり使ってこそ価値があるというもの。何でもよいので、一つ気に入ったものを買って使ってもらいたいと思います。その中で、今までとは違った新しい使い方を見つけてもらえれば、うれしいですね。

▲うるしの酒杯

インタビューを終えて

県立大学 国際関係学部4年
Woo Wei Jieさん

「伝統工芸品は飾るのではなく、使ってこそ価値がある」という言葉をいただき、今までの伝統工芸への考え方を変え、伝統だからこその価値を再発見できました。コップやワイングラスをはじめ、漆のさまざまな使い道にチャレンジしていて、職人さんとしての諦めない精神に感服しました。

伝統の守り人

静岡竹工芸協同組合 神谷 恵美 さん
KAMIYA EMI

職人仕事に魅了された高校生

国指定の伝統工芸品である「駿河竹千筋細工」を作っています。

駿河竹千筋細工と出会ったのは、高校生の時です。進路に迷っていたときに、静岡の伝統工芸品を紹介する本を見て存在を知り、その美しさにたちまち心を奪われ、職人の道を志すと決めました。早速、在学中から夏休みなどを利用して、後に師匠となる職人さんの下で作業を体験し、卒業と同時に弟子入りしました。10年間は下積みと修行、そして自分なりに試行錯誤の日々。弟子入りしてから独立までの18年間師匠の下で学び、今も職人として伝統工芸品づくりに励んでいます。

▶虫籠と花器

インタビューを終えて

県立大学 食品栄養科学部3年
光川 晴香さん

若い年代の人にとって、伝統工芸の職人への道はかなり敷居が高いものだと思います。職人になることを後押しする「クラフトマンサポート事業」の存在は、若者が伝統工芸に興味をもつ1つの機会であり、静岡市の伝統工芸産業を活性化できる、とてもよい事業であると思いました。

背中を押したサポート事業

私のように、思い切って職人の道を目指すのは、まれなケースだと思います。それは今、職人仕事だけでは生活が成り立ちづらい現実があるからです。ましてや、修行となれば師匠にも負担がかかります。私にとって幸運だったのは、高校卒業時に市の後継者育成事業の一環として、独立・開業時の工房の家賃補助などをする「クラフトマンサポート事業」が本格的に始動したことでした。

両親にこの世界へ飛び込むことを告げた時は、とても驚かれました。しかし、この制度が後押しの一つとなり、両親の不安や師匠の負担も軽減できたと思います。この制度はこれからも職人を志す人にとって、大きな助けになるばかりか、職人という世界への間口を広げる役割を果たすと思います。

普段使いで職人の技と魅力を感じる

国内各地には他にも竹細工はありますが、駿河竹千筋細工は唯一、細く割った竹を丸くそいで作る「丸ひご」を使った竹細工です。その魅力は、丸ひごの持つ繊細さと独特の曲線が創り出す空間の美しさです。

私は作品を作るときに、常に同じ品質となるよう心がけています。駿河竹千筋細工は、材料作りから完成までの工程をすべて一人でこなします。材料となる竹は天然素材なので、それぞれに個性があり、癖も違うため、どんな材料でも美しく同じ品質に仕上げることが、職人としてのプライドであり、やりがいでもあります。

美しい工芸品は大切にしまっておこうと思いがちですが、竹は湿気を嫌います。風通しの良いところで使ってもらうことが、長持ちさせる秘訣なんですよ。ぜひ、普段から使ってその魅力を感じ、地元にもすばらしいものがあることに気づいてほしいです。

体験するなら

匠宿 TRADITIONAL HAND CRAFT ARTS CENTER

駿河区丸子☎256-1521
開場時間 / 10:00▸19:00
休場日 / 月曜日、年末年始

体験メニューなど詳しくは、こちら▸

国内最大級の伝統工芸体験施設。今川・徳川時代から静岡に受け継がれ、今も大切に伝わる駿河竹千筋細工・染めもの・木工・漆・陶芸などのさまざまな工芸体験ができます。

また、伝統工芸品をインテリアに使用し、県内産の食材や調味料を使用した食事とドリンクが味わえるカフェも人気です。オクシズ材をふんだんに使ったキッズスペースもあり、大人はもちろん、子どもたちも楽しめます。

伝統工芸品づくりを体験

“大学生2人が挑戦 ～お茶染め抜染ミニトート～”

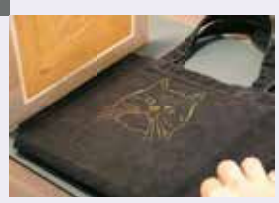
県立大学
経営情報学部2年
八峠（やとうげ） 友香（ともか）さん

県立大学
食品栄養科学部4年
滝田（たきた） 紗恵（さえ）さん

1. 好きな絵柄の型紙を選び、「抜染（ばっせん）」という技法で、オリジナルのミニトートを制作します。自分で型紙を彫ることもできます。

2. 選んだ型紙をバッグの上に固定して、丁寧にのりを置いていきます。

3. 型紙どおりにのりを置いたら、作業は終了。この後、職人が蒸し器で熱を加えて完成します。
※バッグは後日受取り



匠宿には、体験以外にも本格的にものづくりを学ぶためのさまざまな教室があります。もしかすると、「その道」への入り口となるかもしれません。

コンセプトは「歴史と未来を結ぶ場所」

統括責任者 杉山（すぎやま） 浩太（こうた）さん

駿府の工房 匠宿は、ただの体験施設ではなく、体験を通して伝統工芸の持つ魅力を感じ、“本物”を学べる場です。施設内の各工房では、その道の第一線で活躍する職人から、直接、ものづくりへの熱意や伝統技術を教わることもでき、未来の後継者育成につなげることを目指しています。

また、伝統工芸の継承だけでなく、地元の食材を使用したカフェや地域の魅力発信などを通じて周辺地域との連携を深め、地元文化継承の拠点としての役割も担っていきます。

今後も、魅力発信や、今までと違った方法で伝統工芸に触れる機会を提案し、特別なものだと思っていた伝統工芸が、皆さんの日常生活に溶け込んでいくことを願っています。

購入するなら

“ここに来れば、駿府を買える”

駿府楽市

葵区黒金町 アスティ静岡西館内
☎251-1147
営業時間 / 9:00▸21:00
休館日 / 1/1㈷

日用使いできる工芸雑貨から、お土産や贈答品として喜ばれる品まで、静岡の工芸品を幅広く取り扱っています。ここでしか買えない職人の新作、コラボ商品も。

その他、静岡銘菓や農林水産加工品なども盛りだくさん。JR静岡駅にお越しの際は、ぜひお立ち寄りください！詳しくは、駿府楽市のHPをご覧ください。

1月の特別展示

- 1/ 7㈯～ 16㈪
  木・人・心 職人の技展
- 1/18㈬～ 25㈬
  暮らしの中の工芸2023
- 1/27㈮～ 2/21㈫
  楽市 ひなまつり展

“ずっと使いたくなる日用品”

駿河トラッド Suruga Traditional Crafts

職人技を、普段づかいに。

静岡の地場産業界を統括する静岡特産工業協会が運営し、職人がつくる工芸品を購入できる通販サイトです。いつしか貴重品や美術品のように扱われ、人々の暮らしから離れてしまった「伝統工芸品」。実は丈夫で、修理もできて、長く使える、これからの時代に求められる特長を合わせ持つ品。ぜひ、ご覧ください。

問合せ 静岡特産工業協会☎281-2999

▲淡路手付き丸菓子器

▲型染 額絵「日本平」

静岡市は、後継者の育成を支えます

クラフトマンサポート事業

問合せ 産業政策課 ☎281-2100

市では、地場産業の後継者育成、新規就業促進等を図るため、師弟のマッチングから修行支援、雇用奨励、独立支援を行っています。詳しくは、市HPをご覧ください。

皆さんは、気に入って長く使い続けているものはありますか。それは、日常生活をより豊かなものにしてくれていますか。
昔から受け継がれてきた技術を使い、職人が一つひとつ丁寧に作った伝統工芸品は、
きっとあなたの日常生活に癒しと潤いを与えてくれるはずです。

伝統工芸を次の世代へ